
MOON-3 『WOLF MEET VAMPIRE』 < 1 4 >

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 3 『WOLF MEET VAMPIRE』 < 14 >

【Nコード】

N2857M

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

オフィスの友人 貴史を何者かによって殺された秀。その相手と
ヴァンパイア
は吸血鬼だった。友人の復讐のために『闇』の力を引き出す秀 - -

MOONシリーズ『WOLF MEET VAMPIRE』第14話です。

『WOLF MEET VAMPIRE』＜14＞（前書き）

長いですが、お付き合いをお願いします。

『WOLF MEET VAMPIRE』 <14>

<14>

さやかと信二は、次の撮影の打ち合わせのために、秀のマンションを訪れていた。

アイ・ポットをアイボリー色をしたスラックスの膝の上に開き、

「『MONA』の今年の秋服のテーマは『Close To Me』、”永遠に側にいて”よ。この間のミーティングで話したわよね。」

「ああ・・・。」

秀は心ここにあらず、といった感じで答えた。

そんな彼に気を止めた風もなく、

「クライアントからのモデル指名は、特にないわ。私たちに任せるって。」

「問題は、そのモデルだな、秀。」

信二は頭の後ろで腕を組み、「日本の一流どころはほとんど使っちゃったし・・・新人を使うって手もあるが・・・。」

「駄目、使えないわ、駆けだしは。」

さやかは強く反対した。「『MONA』の秋服の発表はイタリアを封切に

ブレタポルテよ。日本の新人じゃ、太刀打ちできないわ。身長も足りないし。」

「それじゃ、仏人でも使えばいいだろ。」

秀は初めて打ち合わせの席で、発言をした。「シャンゼリゼ通りを一日中歩いてれば卵でも駆けだしでも5・6人は見付かるだろうが。」

「それがね、駄目なのよ。」

さやかは一つ大きな溜息をついた。

「モデルはうちに任せるって言うてるけど、一つだけ条件が付

けられてね――東洋美でいきたいんですって。ほら『MONA』
って今までどちらかというと、マドモアゼル系だったじゃない？ 仏
系や伊系を多くつかって。一度米系を使ったことあったけど、あり
きたりの宣伝効果で終わっちゃったからクライアントも懲りちゃっ
てるのよね。」

「確かに、『MONA』のイメージは”マドモアゼル”に定着し
すぎてるな。」

信二が同意する。「あれじゃ、新地開拓は望めない。客層も自然、
固定されるし……」

「そう！ そうなのよね、彼らの心配ごとは。だから、ここで心気
一転？」

『女性』でもない『少女』でもない――極端に言っちゃえば『女』
でもない『男』でもない中性的な魅力を出したいっていうのよね。」

「まるで宝塚の世界だな。」

秀は思い余ったかのように白い天井を眺めた。「逆に今の日本の
ファッションの流れは女性は女性らしく、男性は男性らしく、だか
らな。どこのプロダクション覗いたって、身長はあってもそんな条
件を備えた奴……」

そこまで言って、ふいに口をつぐむ秀。

記憶の中で一人の青年が振り返る……

（あいつなら――和人ならきつと……）

「どうしたの、秀？ 誰か心当たりでも？」

「……いや。」

秀は苦笑して頭を振った。「……佐伯 香でいこう。

彼女は丁度仏系ハーフだし、タツパも度胸もある。ミラノのステー
ジを踏んだ経験もあるから、うまくいくだろう。」

「あ、成程ね。」

さやかは明るい笑顔で彼の案に相槌を打った。「彼女なら、まだ
うちのオフィスで使ってないわ、ラッキーな事に。」

「じゃ、早速スケジュール調整だな、秀。」

信二がさやかに入れたコーヒを一気に飲み干し、明るい表情で秀に声をかける。

「あと、よろしくな信二。」

彼は急に席を立ち、玄関へと向かった。

驚いた信二が、

「おい、秀！どこへ行くんだ……オフィスでの打ち合わせに参加しないのか？」

「そうよ、チーフがいなくてどうするのよ。」

秀のいつもの気まぐれが始まった、とでもいうかのように、ふくれっ顔のさやかが抗議の声を発する。

「悪いね、ちよい野暮用があつて。」

「もう夜の１１：００なんだけど？」

「『２４時間働けますか？』がモットーの秀さんだから。」

皮ジャンを抱えた秀が、玄関から顔だけこちらに覗かせる。「貴史の穴は『ガルボ』の佐伯 俊に埋めてもらえ。話はもう通してある。それから、佐伯 香とのスケジュール調整の件、マネージャーを通して５月末から２週間キープしといた。あとは、直人に青写真撮ってもらつて、詰めてくれ……アングルと照明には十分注意しろよ、相手は仏・伊だ。」

「え……」

ばたん……

茫然とする２人の目の前で、鉄の扉は重い音を立てて閉じられた。

「……悪いな、みんな。」

屋上へと通じる階段をゆっくりと昇りながら、秀は呟いた。
仲間たち一人一人の姿が目に見えぬ。

「もう……お前たちの所へ戻れないかもしれない。」

最後に、貴史の笑顔が浮かんだ時……

キー・・・

屋上の扉が、秀の手によって開かれた。
強い上空の風が、彼の黒髪を揺らめかせる。

眼下には、イルミネーションが散りばめられた夜景。

遙か天空には、星々の瞬きを従えた満月が浮かんでいる・・・
長いこと秀は、その青白い光を満身に浴びたことはなかった。

もう一人の『自分』を目覚めさせるその『月光』を、秀は今まで
避けて来た。

それを・・・彼は今、再び浴びようとしている。

「満月よ・・・俺に力をくれ。」

秀は固く目を閉じて、両手を広げた。

吹き付ける夜風に身を任せ、思う存分その月光^{エナジー}を体中で
吸い取る・・・

「貴史の敵を、あいつらを倒す力を俺にくれ。今こそ・・・！」
月が。

彼の願いに答えるかのように、一瞬、大きく揺らめいた。
強い青白い閃光が彼の全身を包む。

「・・・」

光の洪水の中で、秀はゆっくりと目を開いた。

前方の闇を見つめる、その赤い輝きの瞳。

「・・・そこか。見えた。」

秀は口元に笑みを浮かべた。

「今度は容赦しねえ・・・吸血鬼^{ヴァンパイア}ども。」

右足を軸に、天空へと飛翔する秀・・・

彼の体は新宿上空の気流へと乗った。

『WOLF MEET VAMPIRE』<14>（後書き）

感想がありましたら、お願いいたします。

あと、2 - 3話で終わりです（・・・・・・って次のプロット立てなくちゃ（爆死））

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2857m/>

MOON-3 『WOLF MEET VAMPIRE』 < 1 4 >

2010年10月21日23時00分発行